

秋の深まりとともに柔らかな日差しのお持ちのよい日が続いています。体を思いっきり動かしたり、物事に集中して取り組んだりするにはもってこいです。そこで今回は、この時節によく使われる「小春日和」について話をします。



平成26年度の「国語に関する世論調査」によると、「小春日和」の意味を尋ねたところ、本来の意味である「初冬の頃の、穏やかで暖かな天気」と答えた人が5割強であったのに対し、「春先の頃の、穏やかで暖かな天気」と答えた人が4割強でした。「小春日和」は比較的によく使われるものの、しっかり理解していなければ「春」という言葉に引きずられて、「春先の頃の」といった受け止め方をしてしまうようです。特に20代以下の若い年代を中心に「小春日和」の意味が十分に理解されていないようです。

「小春」は、旧暦10月の別名です。そこで、旧暦について簡単に説明します。現在私達が使っている暦（グレゴリオ暦）は、太陽の動きをもとにして作られているため、「太陽暦」と呼ばれます。一方、太陽暦が明治6年に採用される以前の日本では、月の満ち欠けをもとに、季節をあらわす太陽の動きを加味して作られた「太陰太陽暦」が使われていました。「太陽暦」を「新暦」というのに対して「太陰太陽暦」を「旧暦（陰暦）」といいます。

この「小春」という言葉は中国の6世紀の楚の国の年中行事を記した「荊楚（けいそ）歳時記」に由来するそうです。この歳時記の旧暦10月の所に「天気和煖（わだん）にして春に似たり。故に小春と曰（い）う」とあり、日本の「徒然草」にも「十月は小春の天気」と記されています。だいたい10月末から12月中旬頃までが「小春」に当たり、その頃の穏やかな晴天や好天が「小春日和」です。

ちなみに、「小春日和」のことをロシアでは「女（婦人）の夏（bab'e leto）」、ドイツでは「老婦人の夏（Altweibersommer）」、アメリカではインディアンサマー（Indian summer）と言うそうです。

さて、そんな「小春日和」が続く中、11月1日（月）、本校は創立記念日を迎えます。昨年も書きましたが、開校したのは平成16年4月、石川県立金沢錦丘中学校として設置されたのは前年の平成15年11月1日で、開校5年目に11月1日が創立記念日として制定されました。

この日は、本校の開校18年目の誕生日であり、本校に通う生徒の皆さんにとっても、我々教職員にとっても大変メモリアルな日になります。そこで、この機会に一人でも多くの皆さんに錦中のことやその魅力についていろいろ思いを巡らしてほしいと思いますし、いしかわ教育ウィークの始まりでもあるので、いつも以上に気合いを入れて文武に励んでほしいと思います。

